

2 年 2 組

もなちゃんを幸せにしてあげたい ～もなの暮らしから見える子どもの育ち～



怖いけれど・・・

羊との散歩をしていた時のこと。なるべく羊と距離をとり、顔を真っ赤にして羊を見つめているAさんの姿が目に残りました。「どうしたの」と尋ねてみると、「怖い」と肩をすくませて答えました。「どんなところが怖い」と尋ねると、「お姉ちゃんが飼っていたミロ（ヤギ）に触った時に、後ろ脚で蹴られて、それが怖くて」と教えてくれました。動物に触った時にした怖い経験が、今も心の中に残っているようです。私は、Aさんがこの先、どのように羊とかかわっていくのか気になり、この日1日なるべくAさんと共に過ごすことにしました。

降っていた雨がやんだのを見た子どもたちは、「散歩に行きたい」と言いました。首輪にリードをつけてあげると、子どもたちは羊と共に外へ飛び出していきました。「羊さんが行きたい場所に連れて行こう」、「羊さんが苦しくなるから、リード引っ張っちゃダメ」と、羊が嫌な思いをしないように、最大限の配慮をして散歩をしていきます。Aさんも、羊から少し離れたところをついていきました。その時、羊が自然体験園でフンをしてしまいました。「うんちしちゃった」と大声をあげる子どもたち。それを聞いたAさんは、ダッシュで小屋に戻り、ちりとりとほうきを持って、ゆっくりと帰ってきました。友だちが散歩を続ける中、Aさんは、黙々とフンをほうきで掃き、ちりとりを集めて、小屋の方に片付けに行くのでした。



しばらく散歩を続けると、羊が青草を食べ始めました。それを見た子どもたちは、クローバーや細長い草を手を持ち、羊の口元に持っていく。それを見ていたAさんも、クローバーを1つ摘みました。そして、羊の顔の方に行き、腰をかがめ、口元に、恐る恐る手を伸ばします。羊が動くたびに驚き、後ずさりしながらも、何度も何度も挑戦します。結局、羊は誰の手からも草を食べてはくれませんでした。Aさんは、摘んだクローバーを両手で覆いながら、少し残念そうな顔をしていたのでした。



動物に対して、恐怖心があったAさん。初めは、羊と距離をとり、近づこうとしませんでした。しかし、羊がフンをした時に真っ先に片付けをしてくれたAさんの姿。そして、青草をあげる場面で、Aさんが羊との距離を一気に詰め、口元まで勇気を出して手を伸ばす姿に、Aさんの育ちを感じます。出会ったばかりの羊。どんな行動をするか分からない羊。もしかしたら蹴られるのでは？もしかしたら頭突きされるのでは？そんな恐怖心を感じ、羊に対して何もできなかったAさんが、フンを掃除するという間接的な働きかけをしていきました。さらに、友だちが羊と関わっている様子を見て、直接羊に働きかけ、働き返しを受ける。そうして、わたしたちの羊のことを理解しようとしていったのではないのでしょうか。Aさんは、「まだ、羊さんに触れていない」と言います。しかし、Aさんは、既に心の中で羊に触れているのではないのでしょうか。葛藤しながら羊に働きかけているのはAさんだけでなく、他の子も同じようにして羊を理解しようと、わたしを理解してほしいと願い、働きかけているのだと思います。わたしと羊の関係を編んでいく子どもの姿を尊く思った出来事でした。

「今、幸せじゃないと思う」

羊の名前が「もな」に決まりました。約2週間話し合い、ようやく決まった名前です。「もな」の「も」には、「もぐもぐ食べる」、「1年生の頃に育てたモーニンググローリー（朝顔）のようにきれいに育てほしい」、「小屋を建てるために木材をくれた、木商（もくしょう）さんへの感謝」が込められています。そして、「な」には、「長生きで幸せに暮らしてほしい」という思いが込められています。名前がついたことで、より一層愛着を持って接する子どもたちの姿が増えてきました。

そんな9月のこと。もなの小屋にある事件が起き始めました。鳩の大群の襲来です。この様子を見ていたBさんは、みんなに、「もなちゃんは、今、幸せじゃないと思う。だって、鳩がたくさん来ていて、うるさくて目を覚ましていることもある」と伝えました。それに続けてCさんは、「鳩にエサを食べられているこ

ともあるよね」と言いました。鳩は、もなの小屋にやってきて、外に置いてある配合飼料を食べて去っていきます。そのため、配合飼料の袋はビリビリに破かれ、あちらこちらから配合飼料がこぼれ落ちてくるような状況でした。さらにひどい時は、もなのエサ箱に鳩が入り込み、中に入れてあった配合飼料を奪っていくこともありました。それによって、エサ箱の中には鳩の羽が入り、もなが羽を食べてしまう危険性もありました。子どもたちにその様子を写真で見せると、Dさんは、「もなちゃんも幸せじゃないし、俺らも幸せじゃないよね」と語りました。そうして子どもたちは、鳩を退治する方法を考えていきました。Bさんが提案したのは、配合飼料を蓋つきのケースに入れること。Eさんは、チモシーを蓋つきのケースに入れること。Fさんは、かかしを置くこと。Gさんは、壁にネットを張ることを提案してくれました。もなのために、今自分にできることを考え、行動に移そうとする姿に、子どもたちが抱くもなへの愛情をより一層感じました。



「可能性が0じゃないなら産ませられない」

11月のある日。散歩に行ったもなと子どもたちが教室に帰ってきませんでした。外を覗いてみると、もなを一生懸命引っ張る子どもの姿と、その場にとどまろうと踏ん張るもなの姿が見えました。するとFさんが、「もながニコと幸（ヤギの親子）の小屋から動いてくれない」と伝えにきました。その後も何日か様子を見ましたが、もなはニコと幸の小屋の前で拾い食いをしたり、ニコや幸とにおいをかき合ったりして自分の小屋に帰ってこない日が続きました。Bさんは、「ニコの小屋がきれいであってうらやましかったんじゃないかな」、Hさんは、「一人ぼっちで寂しいんじゃないかな」、Dさんは、「幸くんが好きなんじゃないかな」と考えていきました。そこで、伊香保グリーン牧場の前田さんにそのことをお伝えし、理由をお聞きしました。前田さんからは、「お友だちが欲しいんだと思います。羊は元々群れを作って生活するので、群れを作りたいのだと思います」とのお答えをいただきました。それを聞いた子どもたちは、お金がかかったり、世が大変になったりするというマイナス面を考えながらも、Iさんが、「幸せのためにはそれは仕方がないこと。幸せになるにはお金は必要」と語り、その言葉をきっかけにもう1頭、羊の友だちを迎えることになりました。



そこで話題になったのは、出産をさせるかどうかでした。Gさんは、「家族が増えれば群れが大きくなって、もなも幸せになる」と言いました。反対にCさんは、「死んじゃうかもしれない」、Fさんは、「もな産みたいかどうか分からない。産みたくないのに産ませるのは幸せなの?」と言いました。次第に、子どもたちはもなが死んでしまうかもしれないという不安の声に耳を傾けはじめ、「産ませたくない」という意見が増えてきました。私も出産できるのかどうか、本当のことを知りたかったので、獣医の佐藤先生に話を聞きました。佐藤先生からは、「今は体重が足りないかな。来年の8月末くらいになれば、交尾も可能でしょう」とのご意見をいただき、子どもたちにもそれを伝えました。その言葉を聞いた子どもたちは、以下のように話し合っていました。

Bさん：ミロ（ヤギ）が出産するとき、すごい血を流していた。俺は出産できるとしても、産ませたくない。

Jさん：俺は産ませたい。赤ちゃんを見てみたい。この体験は一生に一度だと思う。

Iさん：産ませたくない人も、赤ちゃんを見てみたい気持ちは一緒だと思う。でも、もなが死んだり苦しんだりするならやめた方がいい。

Bさん：俺たちがもなを飼っているのって、もなの幸せのためでしょ。もなが苦しむのはもなの幸せじゃないよ。もなが産みたいなら産ませたいけれど…。

Hさん：でも、もなの気持ちは俺たちには分からないよ。

Cさん：必ず無事で産めるなら産ませたいけれど、死ぬ可能性が0じゃないなら産ませられない。

この後も子どもたちは産ませるかどうかが、時間をかけてじっくりと悩み、答えが出ぬまま授業は終わりました。

私は、子どもたちが赤ちゃんを産むことに賛成するに違いないと思っていました。「もなの子どもを見てみたい」、「赤ちゃんができたらもなも幸せになる」、そんな考えをもつのではないかと考えていたのです。しかし、子どもたちから発せられた言葉はその真逆の答えでした。私は、子どもたちがどれだけもなのことを大切に思ってお世話をしていたのかに気づかされました。私はもなのことを、学びのための道具のようなものとして見てしまっていたのかもしれない。しかし子どもたちにとっては道具なんかではありません。共に学ぶ大切な仲間の一人なのです。だからこそ、Iさんの、「赤ちゃんを見てみたい気持ちは一緒だと思う」という言葉から、「赤ちゃんを見たい」という思いと、「もなを苦しめたくない」という思いを天秤にかけて葛藤していたのでしょう。子どもたちが考えていることは、大人が想像している以上に深く、そして尊いものなのでした。

